

第2章

研 修 会



第1回研修会(オンライン録画配信)

乳児の生活習慣と保育者の関わり

講師 樋口正春氏



私は樋口正春です。堺市出身なので今回、堺市の方にお話しするのは大変うれしいです。現在千葉県まどか保育園、東京練馬区の石神井町さくら保育園と豊玉保育園の計3園の理事長をしています。まどか保育園は社会福祉法人立の定員約100名で開設46年の園で私が運営しだして26年になります。練馬区の石神井町さくら保育園、豊玉保育園は公設民営です。さくらは126名、11年目、豊玉保育園130名で2年目です。

本日は、乳児がどのように生活習慣を身に付けていくのか、また保育現場ではどのように関わっていけばよいのかについてお話いたします。3園で実践してきたことをもとに、保育創造セミナーの講座で全国の保育園・幼稚園に関わってきましたが、多くの園が生活と遊びを主体とした保育を実践されるなかで、生き生きとした様子や子どもたちが良い生活習慣を身につけるといふ姿が見えてきています。食事の習慣、衣服の着脱、排泄、睡眠など生活の軸となる部分を子ども達はどのように身に付けていっているのかをまどか保育園、さくら保育園の実践を見て頂きながらお話をしたいと思います。

「生活の形」を見直してみよう

園が子ども達とどう生活の日々を作っているのかが、大きなテーマとなってきます。一般的には年間保育計画、月案、週案などの形で保育内容を作っていきますが、「生活の形」についてどれほど園として考えたり語られているのでしょうか。まどか保育園は7時から20時まで、練馬区は7時から20時半までという大変長い時間子どもさんを預かっています。子どもの目覚めている時間の大半を保育園の中で生活しています。長い子は10時間以上の生活を保育園でしているのですから、生活のあり方を考えずに保育はできません。

どう生活の組み立てを考えていけば子どもの中に習慣化されるのでしょうか。習慣化されるには基本的に生活の中で同じ場面が繰り返されるということが大事です。では、繰り返しの中でこうなっているのだなとわかっていくために、どんな環境を作っていけばよいのでしょうか。大人がやっていることを見て、そろそろご飯だなとか、外で遊んだらそろそろ部屋に入ろうなどの生活の流れが、子どもから見てわかりやすい形になっているかが大切なことです。生活の形には「見える形」と「見えない形」があります。「見える形」は園に来てどこにどうおもちゃがあるか、食事の場や席、寝る時の場所など、生活の環境として目に見えるものが安定していることが大事です。「見えない形」としては「日課」と呼んでいる生活リズムです。毎日どういふ時間の流れがあるかということ。つまり「ここは何をするところ」「今なにをする時」という二つがとても重要なポイントになります。そのことを映像で紹介いたします。

0歳児保育室

さくら保育園の0歳児12名のクラス。生後100日から8か月までの子が4名、2対1の配置基準で保育者2名。8か月以上の子は3対1で計5名の保育者で保育しています。



食事コーナー

最初は保育者の膝に抱っこして食べさせる。
食事コーナーは周りが見えない環境にしている。



大好きなかくれんぼコーナー

左の棚の上には絵本。0歳から2歳前半までは基本的に大人が絵本をとって子どもに読む。力の入れ具合がまだ分からないので破ってしまうこともあるし、絵本は大人が読んであげるものという考え方で大人が大事に扱うことを見せていく。

右のレースを張ったついたての向こうはおむつ替えコーナー。人前でおむつを交換する事は恥ずかしいという気持ちを大事にしていく。他の子どもが保育者がそこにいることがわかり安心できるようにしている。



受け入れ室

コロナ禍と関係なく以前から保護者は保育室の入口までとしている。多くの保護者が室内に入ると、たとえば遅くまで残っている子は他の保護者が迎えに来たら不安になる。登園すると着替えの服や、連絡帳を入れ、最後にここで園の布おむつに替えてもらう。おむつがぬれると気持ちが悪いという感覚を感じてもらいたいので布おむつにしている。布おむつはレンタルなので、処理はすべて業者に委託している。



おむつ交換台



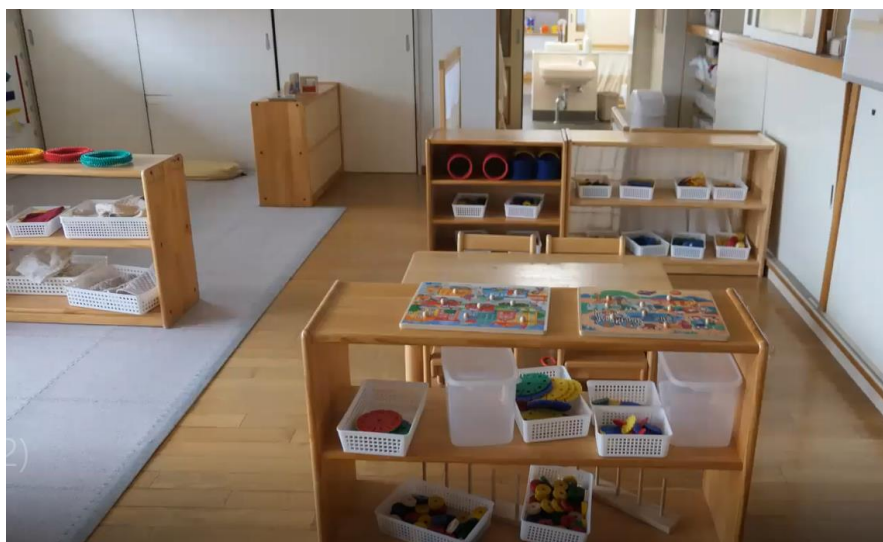
着替え入れ



部屋の入口にお誕生日カード

「きょうは〇〇ちゃんの誕生日だな」とわかる。月でまとめてやるのではなく、一人ひとりその子の誕生日に祝ってあげる。

1 歳児保育室



子ども数 21 名。1 歳になると遊びが広がってくるので、おもちゃを自分でとれるように配置しています。何が入っているか子どもが見てわかる、そしていつも同じものが同じところにあるようにしています。また、部屋の中にコーナーをつくり「ここは何をすること」がわかるようにしています。遊んだ後に片付ける大人の姿を見せて、「遊んだらもともどもどすよ」とモデルを見せていきます。大好きな大人のすることだから子どもたちは真似をします。「お片付け」という抽象的な言葉を使わず、「遊んだらもともどもどそうね」「落ちているものはひらおうね」と具体的に言葉をかけていくようにします。



ままごとコーナー

ままごとの食材になるように、お手玉やまな板など台所と同じように作っている。口に入れても飲み込めないように気を付けて、食材は布やフェルトで作ったものが多数を占めている。子ども達が外遊びに出て行ったあと、保育者がきれいに片づけている。



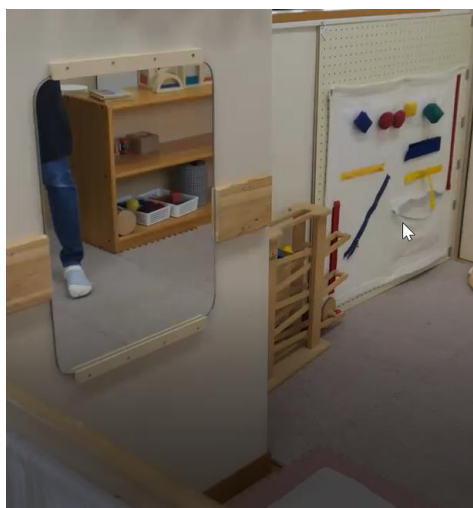
食事コーナー

遊んでいる所から食事場面が見えるようにしている。新入園児で1対1で関わる子もいるが、だいたい後半は6対1で食事ができるようになる。月齢や登園時間などでグループをつくり、同じ保育者が食事と排泄に関わる育児担当保育をしている。



お世話遊びコーナー

人形には名前があり、物ではなくヒトとして子どもがお世話をします。



壁際に貼り付けた遊びコーナー

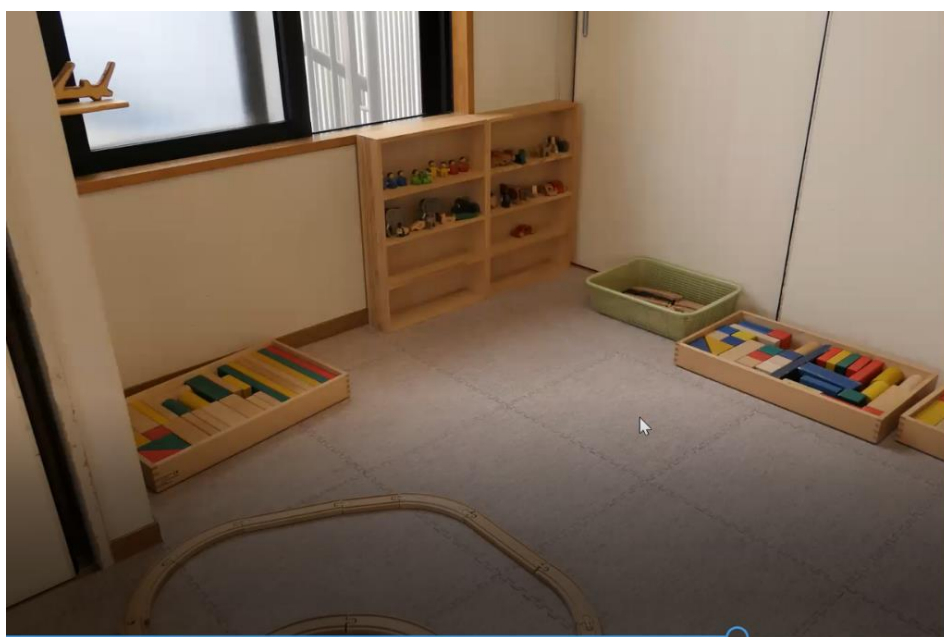


机上遊びのおもちゃ
チェーンつなぎ、ロンディなどつなげる遊びや簡単なパズルなどを子どもにわかりやすく。



積み木コーナー

2歳児保育室



遊びがどんどんダイナミックになる時期。積み木、汽車、棚の中にはたくさんの動物。積み木遊びのなかに汽車や動物が入ってきてストーリーが生まれてくる。



机の前に立てかけているのはホワイトボード。マグネットの動物などを貼り付けて遊ぶ。手前の棚にはモザイク遊びのスティック。(左写真)



モザイクの作品(右写真)。『こっこさんとあめふり』(片山 健さく 福音館書店 2003)の絵本がモザイクの表現とつながっている。作ったものを飾ってあげることで達成感につながる。



ままごとコーナー

1歳に比べると食器や食材など道具が増えてくる。どこに何があるかが分かっているので、ままごとが好きな子は朝来ると一直線にこのコーナーに来る。使ったら元の棚に戻すことを基本にしているので、遊んだらそこに戻すようになる。

どこに何があるのかがわかり、変わらない環境構成。保育室の天井が子どもにとって高く感じるので天蓋をつけて落ち着けるようにしている。寝転ぶとより天井が高く感じるので、おむつ交換の場の上は必ず天蓋をつけることで、おむつを替えてくれる大人に意識が向く。



生活習慣とは

生活するのに必要な決まりやルールがわかる

自分のことが自分でできるようになるような知恵や知識、技術などを習得する

大人の指示や命令がなくても、自分で判断して考え、行動できるようにする

社会生活の中で、自分自身の生活をより快適にしていく

自分が生まれ、生きていく社会の歴史や伝統を守る

教えられるのではなく、生活を通して自然に身につけていくもの

生活習慣を身に付けるためには

- ・「見える形」が明快であること。子どもに分かりやすい形がある
- ・「見えない形」として日課があり、規則正しい生活の中で先を見通す力が付くということが教育になっている。
- ・生活するのに必要なルールがある。
- ・大人が過干渉にならずに、少し待ってあげて「自分でできたね」と持っていく。

乳児の食事について

- ・最初は1対1で子どもを膝に抱っこして食べる「抱っこ食べ」から始める
- ・いつも同じ大人がかかわるように育児担当をしている
- ・食事に集中できる環境作り ー いつも同じ場所、同じ席で同じ人と食べる
- ・食事がしやすい机、椅子の高さ
- ・温かい物を温かいうちに（時差配膳、栄養士との連携）
- ・一人ひとりにあった量（ご飯、汁物は担任が配膳、おかずの微調整も担任が行う。）
- ・子どもが自分で食べようとする気持ちを大切に（発達に合ったスプーン・食器を用意、子どもの姿を待ちながら関わる。）
- ・苦手なものを克服するというよりも好きなものが増えていくように
- ・食事が楽しくて幸せな時間となるように
- ・空腹時間を作るよう生活の流れを考える

これは私の保育園だけでなく、全国の多くの園で実践されている乳児の食事について簡単に書いたものです。0歳児は抱っこ食べから始まります。よく柵のある椅子に座らせることがありますが、椅子に座って落ちる子は椅子に座るからだが出来ていないということです。背骨がしっかりと重い頭を支え、足が床につくという3点がしっかりとできていないと座れませんので、保育者が子どもの身体を支えて1対1で食べさせます。集中して食べるので15分から20分で食事が終わるようになります。1年通して同じ保育者が食事に関わるという育児担当をしており、同じ保育者が関わることで子どもはより強い愛着をその保育者に抱くようになります。アタッチメントと言われる育ちの上で大変重要なものが、園の生活の中で育まれていきます。

次に食事に集中できる環境づくりです。特に幼い子どもは周りのちょっとした動きに敏感に反応するので、近くで遊んでいる子がいるところでは食事に集中できません。ですからいつも同じ場所で同じ人と、出来たら周りにカーテンなどをして、食べるものと食べさせてくれる人だけが目に入るような環境で食事をするのが重要です。

自分で座るようになった場合も、椅子や机の高さが合わないとうまくスプーンを使う事ができないので、その配慮が必要です。また、少人数で食事をするので、月齢や登園時間などを配慮して第1グループ、第2グループとわけて食事をしますが、後から食べる子が冷めたものを食べることにならないように、温かいものは温かい状態で食べられるように、ごはんやおつゆなどはジャーや保温調理なべなどで保温し、調理室の協力を得て時差で食事をあげてもらい配膳をします。子ども15人、保育者3人とすると、第1グループが5人、第2グループが10人として、第1グループの子が食べている間に第2グループの保育者がコットの準備をします。第1グループが終わると2名の保育者で10人の子どもに関わる。これが基本の体制となります。第1グループに配膳した15分後に第2グループの食事を配膳できるように時差をつけ、温かい状態で子どもの摂れる量に合わせた配膳を保育者がします。

苦手なものを克服するのは大事ですが、好きなものをしっかり食べて「食べるのが楽しい」という気持ちを育てていく事が大事です。今はコロナ禍で「黙食」という楽しくない食事の状況になっています。早く日常に戻ればと思います。楽しく食べるためには空腹時間をつくる事が大事ですが、午前のおやつが昼食のじゃまをしていると感じています。昔のように栄養が足りない時代には午前のおやつが必要でしたが、いまは実態に合っていないように思います。少なくとも2時間の空白時間がないと次の食事ができないと考えると、どのように取り組んでいくのかを真剣に考えて行く必要があります。歳児ごとの食事環境、子どもの様子を映像で見て下さい。

0歳児



食事の準備ができて保育者が食事コーナーの入口に座ると、子どもが気づいて寄ってくる。



座ったら食事の準備はできている状態。
エプロンをつけ、手拭きをする。



保育者は介助用のスプーンで食べさせる。前のめりに自分から食べにくることが大事。



時々見上げると保育者がいて、「おいしいね」と顔を見合わせて。

11 か月児

手で持ちたい子には主にゆで野菜などの食材を用意する。手で食べるものとそうでないものを11か月児も見分がついている。食事はだいたい15分くらいで食べ終わる。



0歳児最後の時期で3対1で食事。「おいしい、おいしい」という言葉も出ている。すくいきれぬ皿と口の中にすっと入るスプーンは、子どもの成長を助けてくれるいい道具である。



手首をもって無理やり食べさせると自分で食べたという感覚を持ってない。できるだけ肘のところをそっと支えて自分で食べた感覚を持ってもらうようにする。

「ごちそうさま」をして椅子を中に入れて、寝る場所に自分から行く。



食べてすぐ寝るといのは、食べると胃にたくさん酸素がとられるので
眠気がくるので生理的に適っている。

1 歳児



遊んだ後を片付けて、食事の場所へ。

配膳されてから食事場所の入り口で座り、エプロンを付け手を拭いてもらう。

この子たちが食事を終わるとすぐに寝ることができるように、他の保育者はコットの準備をする。



午睡について

長時間、園で生活しているのでお昼寝する事は大事です。同時に夜間の睡眠を十分とれるようにしないといけないので、24時間の生活リズムとして考えていかなければなりません。そういう意味で午睡で寝させ過ぎないように、2時くらいには起きるようにしています。午睡は4歳児までは必要と考えていますが、4歳児クラスでは月齢5歳を過ぎた子どもで眠れない様子が続くと、強制せず起きて遊んでいてもよいと考えています。お昼寝がいやだから保育園に行きたくないという子どもが結構いると聞きます。おそらく寝かされるのがいやなんだろうと思うので、どうすれば1日の生活の流れの中で自然に眠れるようにするのが課題です。

以前は部屋を真っ暗にしたり、パジャマに着替えてということがよくありました。暗くしてしまうと夜の睡眠になってしまいます。パジャマに着替えることも同じです。昼寝は20数年前からコット（午睡用ベッド）を使っています。コットは寝る場所が邪魔されず自分の場が確保されていること、ほこりが立たないので昼寝で使うのにはいい道具です。コットから落ちないかと聞かれることがありますが、お昼寝で落ちる子はいません。以前に年長さんのお泊り保育で使った時、大半の子が落ちました。夜の睡眠は何度も寝がえりをうち態勢を変えるので落ちるわけで、やはり簡易ベッドだから夜は使えないとわかったし、昼寝と夜の睡眠がこれほど違う事がわかりました。



排泄について

排泄が心地よい時間になってほしいと願っていますが、よい取り組みがされていないあと心を痛めています。どんな小さな子ども人の前で排泄しているのを見られるのは恥ずかしい気持ちを持っています。しかし、平気で他の子の前でおむつを替えたり、トイレで並んで横の子が見える状態ですということも2歳くらいでもしています。2歳くらいになるとはっきりと嫌がる子どももいますし、口には出さないけれど、恥ずかしいという気持ちを持っています。だから映像で紹介したように、私の園では他の人から見えない場所におむつ交換の場所をつくっています。子どもの人権という事を考えると、大人が「自分がされるといやと思う事を子どもにすることは人権侵害」です。そういう視点で排泄について考え、排泄が心地よい時間になってほしいと願っています。

おむつ交換が心地よい時間になるように

- プライバシーを守る。
「恥ずかしい」という気持ちを大切に。
他の子どもから見えない場所におむつ交換台を設置する
「大人が嫌なことは子どもも嫌」という育児の基本を大切に。
- 「今は何をやる時か」「ここは何をする場所か」がわかるように
- 作業ではなく、1対1で過ごす大切な時間
わらべうた、表情、視線を合わせる、優しい言葉かけ、足首を持たない
- 一斉ではなく、一人ひとりの感覚で誘い、自立を助ける。
- 布おむつを使用

トイレトレーニングということがありますが、トレーニングという捉え方ではなく、その子の生理的な発達が熟した時におむつが取れると考えたらよいのであって、早く取ればよいということではありません。個々の発達やリズムが異なるので、その子の一番いいタイミングをつかんであげれば、おむつを取るのはそれほど難しい事ではないと思っています。おむつを替えることが、両足をぐっとあげて作業になってしまうことが一番こまることです。コミュニケーションするいい時間ととらえて子どもと向き合ってください。

「おむつかえようか」「ちょっとお尻をあげてくれる」と言葉をかけながら、わらべうたで声をかけながら、「じょうずね」「きれいになったね」「きもちいいね」と、安心して人から見られずに替えてもらっています。替えてもらいながら自然と保育者に視線が向くように、天蓋をつけるとよいでしょう。一人一人の排泄の時間、教えてくれたかどうかなどを記録しますので、担当保育者が休んでも前日の記録を見るとわかるようになっています。

排泄間隔表

- ・レンタルの布おむつを使用。
- ・一斉ではなく、一人ひとりの排泄間隔を大切に。
- ・誰が見ても間隔や様子がわかるように、書き方を統一。

時間	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
A		40		25 41			55			30			
B							55			50			
C		30		30 41			60			35			
D		25		15			20			30		40	
E				30 41			60			40			
F		30			20 41			15					
G		40					10			05			
H		15 41		10 41			15	15		20			
I				05 41			20			50			
J			00 41		60 41		60 41			10			
K			30			30 41		30 41		55			
L							05		40 41		30		
M				15 41		30 41		15	55 41		20		
N				30 41				05		40			
O		55		30				30		00 41		45	

おしっこ → 数字のみ × 1枚
 便 → 口で囲む × 2枚 (プラス分 → +1, +2)
 → 教えてくれた
 × → 履けてない
 レ → トイレで出なかった
 ト → トイレで出た
 紙オムツ →



このように育児担当保育によって、食事、睡眠、排泄というもっとも生理的な部分で、同じ保育者に関わってもらえることは、子どもが大人を信頼するという大切な土台を育てていくと考えています。

おわりに

安定した日課(乳児の生活の流れ)

7:30	9:00	10:00	10:20	12:00	14:00	14:20	16:00	17:00	18:30			
順次登園	室内あそび	テラス・戸外あそび	室内あそび	順に昼食	食べ終えた子から午睡	順次起床	室内あそび	順に午後食・おやつ	テラス・戸外あそび	室内あそび	順次降園	延長保育

ここに書いているような日課が0歳児の後半にできるようになればいいと思います。個々の生理的リズム、月齢をどう生活リズムに近づけていくのかを0歳児の課題としていきます。安定した日課によって、先を見通して生活していく事が可能になっていくので、とても大事なことです。

先にも触れていますが、最後に各歳児の遊びについてご紹介しまとめと致します。

0歳児クラス 年間計画(あそび)

	3ヶ月	7~9ヶ月	1歳1ヶ月~1歳3ヶ月	1歳6ヶ月~1歳11ヶ月
ねらい	・視覚や聴覚に働きかけその刺激が運動を引き起こすようにあそぶ	・移動運動を促し取るう、触ろう、近づこうとする意欲を持ってあそぶ	・手先、指先を使う遊びにも挑戦してみる ・生活の中の物事を模倣して遊ぶ	・ひとつのあそびにじっくりと取り組む
おもちゃ	・チェーンリング ・モビール ・リングリッピング ・布 ・ベビーマット ・音の出るもの、 ・色鮮やかなもので凝視、追視を促す	・チェーンリング ・モビール ・ピラミッド ・ベビーキューブ ・大きいお手玉 ・ベビーボンゴ ・ペットボトル ・リングタワー ・マッサージリング ・タワー ・ポウル ・NICスロープ ・フープ ・カラームカデ	・チェーンリング ・ポットン落とし(ピース) ・ビルディングビーカー ・長いお手玉(スナップ付き) ・フォームス ・ポストボックス ・メタルフォン ・木琴 ・ミラクルバウンディング ・壁掛けおもちゃ(ポットン落とし、スイッチ)	・ままごと(キッチン、食材、鍋、包丁) ・エプロン ・ジルケうさぎ、くま ・スリーピングベビー(オムツ交替台) ・スナップ付きお手玉 ・ジオピース ・クーゲルタワー ・プラステン ・リグノ ・ネフスピール ・つみき(5cm) ・ペグ付きパズル ・ハンマートーイ ・ねじのおもちゃ ・ロンディ

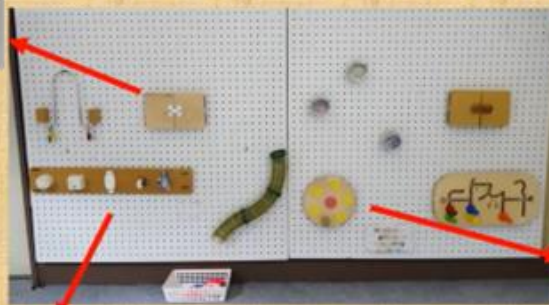
0歳児 室内環境 <年度初め>



- ・五感にゆっくりと働きかけるもの
- ・口に入れても安全なもの
- ・様々な感触を楽しめるおもちゃ
- ・壁掛けのおもちゃ
- ・音の鳴るおもちゃ
- ・追視が出来るおもちゃ 等

室内あそび(0歳児 壁掛けおもちゃ)

- ・子どもの興味を遊びの中で・・・
- ・子どもの発達に合わせて設置する高さも変える。



室内あそび(0歳児 手作りおもちゃ)

ポットン落とし



ティッシュペーパーのおもちゃ



かくれんぼ棚



押し箱



0歳児 室内環境
<後期>



- ・ままごとコーナー
- ・机上あそび
- ・積み木、机上積み木、レール汽車
- ・手先を使うおもちゃ 等

室内あそび(1歳児 手作りおもちゃ)

手作り絵本

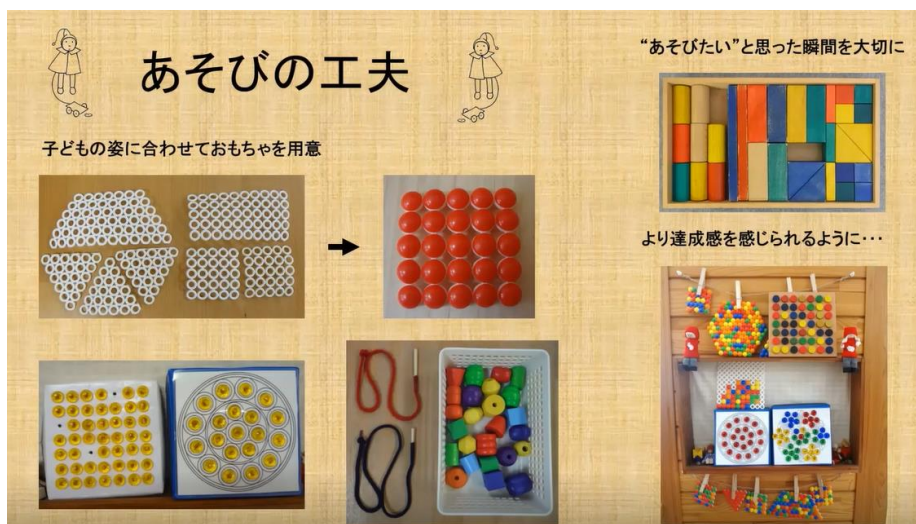


スナップ付きのおもちゃ



ボタン・ファスナーのおもちゃ





樋口正春プロフィール

社会福祉法人高洲福祉会まどか保育園・石神井町さくら保育園理事長。保育創造セミナー代表。

毎年、全国で数多くのセミナーを開催、またドイツでの海外幼児教育研修を30年以上続けている。

著書に『保育と環境』（ちやいるどネット大阪 2003）『根っこを育てる乳児保育』（解放出版社 2013）『子育てにおもちゃを』（エイデル研究所 1991）『絵本から広がるあそびの世界』（風鳴舎 2017）など。

第2回研修会(オンライン録画配信)

乳 児 の 遊 び

講 師 瀧 薫 氏



遊びとは

本日は遊びをテーマに保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領と保育実践をつなげて考えてみましょう。

指針では「保育は遊びや生活を通して総合的に行うこと」とされています。ですから遊びの質がとっても大事だという事です。では人間にとって遊びとは何かから始めていきましょう。

遊びについてカイヨワの『遊びと人間』、ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』という名著をひもといてみましょう。ホモ・ルーデンスとは「遊ぶ人」という意味です。改めて読むとハッとさせる言葉がありました。

すべての遊びは第一に、
何にもまして一つの自由な行動である。
命令されてする遊び、
そんなものはもう遊びではない。

私もつい「自由あそび」と言うことがありました。これは二重に同じ言葉を重ねているので、違和感のある言葉だということです。自発的な遊びの重要性について、教育・保育要領にも記載があります。

自発的な活動としての遊びにおいて、園児は心身全体を働かせ様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的な活動としての遊びは乳幼児期特有の学習なのである。

【幼保連携型認定こども園教育・保育要領 第1節 教育及び保育の基本】

大人が指導する遊びではなく子どもから出てくる遊びこそが遊びであり発達の基礎ですよと言っています。今日は自発的な活動としての遊びについてお話していきます。なぜなら遊びの質こそが保育の質だからです。そもそも乳幼児期は知識・技能を一方的に教えられて身につく時期ではありません。子どもの興味・欲求からでてきた直接的・具体的体験を通して行われるのが保育です。子どもの生活は自発的な遊びに満ちていますから、遊びと言っても難しく考える必要はありません。



実際の子どもの姿から見てみましょう。ボールが動いた時にゆらゆらと影がうごいた、その影の発見をして手でつかもうとしています。この時にこの子が何に心を動かされたのかに気が付かなければ、「ボールをとってあげようね」と渡したりします。でも子どもの姿をよく見ている先生は「いま、影をたのしんでいるぞ」とわかります。遊びの支援とは子ども理解から始まります。

担任の保育者が、この姿を見て光の遊びを考えました。東の窓に赤、黄、青の食紅で色をつけた水を入れたプラスチックボトルを置きます。すると、一定時間、毎朝虹が床にあらわれます。すると、歩行ができる子どもが、一本橋のように歩いていました。そのうち、ボトルが虹をつくっている事に気づき、床の虹とボトルを交互に指さし、保育者に伝えていました。



保育者の専門性とは

「託児」と「保育」の違いは何でしょうか。もし保護者に違いは何かと聞かれたらどう答えますか。保育所やこども園には資格が必要、これが大きな違いです。だから私たちは要領・指針に基づいて保育を行っているわけです。では、私たちの専門性とはどこにあるのでしょうか。発達過程を押しやること、養護と教育を一体的に行うこと、ここに専門性があります。

発達の捉え方

生活に必要な能力や態度などの獲得については、どちらかという大人に教えられたとおりに園児が覚えていくという側面が強調されることもあるが、乳幼児期には、**園児自身が自発的・能動的に環境と関わりながら、生活の中で状況と関連付けて身に付けていくことが重要である。**

【幼保連携型認定こども園教育・保育要領 序章(2)①】

発達過程

子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、様々な環境との相互作用により発達していく。保育所保育指針においては、子どもの発達を、**環境との相互作用**を通して資質・能力が育まれていく過程として捉えている。すなわち、**ある時点で何が、「できる、できない」といったことで発達を見ようとする画一的な捉え方ではなく、それぞれの子ども育ちゆく過程の全体を大切にしようとする考え方**である。

【保育所保育指針解説書 第1章総則1(1)イ】

指針では発達は目に見える姿だけで「できる・できない」と評価するものではありません。また、乳幼児期の内容のねらいは到達目標ではなく方向目標であるということも重要です。では「養護」とは何でしょうか。定義があります。

養護とは何か

保育における養護とは、子どもたちの生命を保持し、その情緒の安定を図るための保育士等による細やかな配慮の下での援助や関わりを総称するものである。

【保育書保育指針解説書第1章1(1)イ 保育所の役割】

心と体を細やかな配慮のもとで援助や関わりをしましょうということです。では具体的な例を見ていきましょう。

9か月児、『いない いない ばあ』の絵本が大好きな子です。「いないいないばあ」と言うと大人の顔を見る時期です。自分、相手、物という三つの関係性が分かってくる頃です。だから「いないいないばあ」の遊びをつくりました。



担任が「いないいない」と言うと自分で「ばあ」と開けています。遊びをいっしょに創りだしている姿です。

わらべうたもそうです。「うえから したから おおかぜこ〜い こいこいこい」布を使った遊びも皆さんよくされますね。この子が布を引っ張って「ばあ」と出てきました。布は先生の顔が見えると安心できるので厚布でないほうがいいですね。

上から下にひくという動作はエプロンを付けたり、帽子をかぶったり洋服を着たりといった生活の力につながります。遊びは「教育」、「養護」は生活。「養護と教育の一体化」は、これらささやかな日々の姿のなかにあります。それなら皆さん「やっている」と思われることでしょう。



あなたが一緒にいて心地よく、
安心できる人はだれですか？

その人は、あなたに
どんなふうに接してくれますか？

その人といると、あなたは
どんな気持ちになりますか？



その人が誰であっても、その人はあなたの気持ちを受け止め共有してくれる人、あなたの立場に立って味方になってくれる人でしょう。大人だって応答的であること、受容的に関わってもらえる身近な人がいることで、

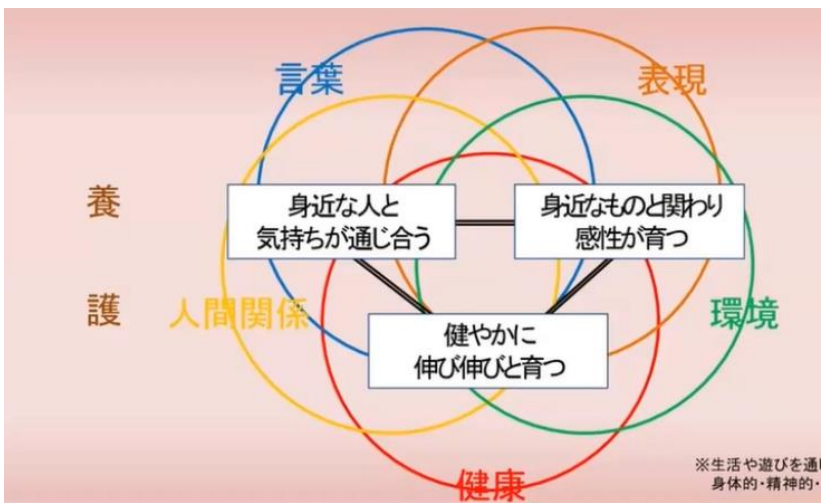
あす一步踏み出そうかと思えます。だから3歳未満で大事なことは受容的・応答的であることです。自己肯定感と基本的信頼感を育てる大事な時期です。指針には次のように書かれています。

乳児保育 社会的発達 「身近な人と気持ちが通じ合う」

乳児期において、保育士等による受容的で応答的な関わりを通して芽生え、育まれていく自分を肯定する気持ちは、生涯にわたって人との関わりの中で生きていく力の基盤となるものである。

【内容⑤解説文】

乳児保育の視点



厚生労働省雇用均等・児童家庭局「保育所保育指針の改定について」2017

1. 身体的発達の視点



まず「生活」と「遊び」を分けてあげると動線がよいでしょう。この部屋は奥が睡眠、食事の「生活」、手前が「遊び」の場です。

姿勢変化の発達と、歩行の獲得のために

首すわり	頭を少し持ち上げる 頭の位置を保つ
寝返り	グライダーポーズ
ハイハイ	ピポットターン 支え座り
お座り	よつ這いから、高這いへ
つかまり立ち	パラシュート反射
つたい歩き	
一人歩き	ハイガード 段差を超える

保護者はハイハイした、歩けるようになったという見える成長が気になります。私たちプロはその前段階の発達を見ていきます。

グライダーポーズが出来ているからハイハイの準備ができていな、ピポットターンができるといいなと思います。

身体の発達の支援であっても、受容的・応答的に支援していくことが本当に大切です。ボールのおもちゃを乳児さんはよく使います。段階に応じて見ていきましょう。

手足をばたばたさせてご機嫌です。目の前のボールをつかんで遊んでいます。ところが、ボールが横に転がってしまいました。すぐにとってあげてもよいのですが、あれだけ手足をばたばたさせているしご機嫌なのでピポットターンができるだろうと私たちはわかります。だからちょっと見守ってみました。するとピポットターンをして自分でボールをとりました。気を付けないといけないのは、わざとボールを遠くにやってピポットターンが出るように鍛えてやろうではなく、その発達の力がついているので少し待ってみようかなという事です。



ハイハイができるようになってきたら、ボールはあまり転がりすぎないほうが追視をして追いかけやすくなります。手先を使う遊びも重要な時期ですので、中の球を取り出すことができるフレームボール(写真)を用意します。最近接領域というちょっとがんばったら出来ることを用意すると、遊びとして面白いし発達の支援になります。

歩けるようになったら脚力、体幹をしっかり育てるとバランス感覚が育ちます。歩けるようになったら、立ったり座ったりしてボールを入れて遊ぶものもいいですね。

これは箱積木です。ハイハイしている時期の子は登りたくなりますし、ハイハイが安定してきた子どもは、斜めにしてあげると高這いで登ろうとします。歩けるようになると、適度な段差をつくることもよいでしょう。

もう少し歩行が安定してくると大きいものを持ってみたいくなる。見立て象徴機能が育ってきたら、ハンドルをつけて蹴って進む。それが土踏まずの形成につながっていきます。このように子どもは自分の発達に必要なものを知っています。だから自発的な遊びは学びであり発達の支援なのです。



この箱積木は缶ジュース、缶ビールの箱を使い梱包材などをつめて布でくるみ、マジックテープでくっつけることができるようになっています。簡単に作れるので作ってみてください。このように自発的にやってみたくなる事こそ、発達の原動力。この時に喜びを共有してくれる人がいることで、「またやってみよう」と自主性と向上心につながっていきます。

2. 社会的発達(人との関わり)の視点

子どもはわらべうたとなえ遊びなど、リズムのある言葉が好きです。なぜ好きかと言うと、子どもは言葉をからだで覚えるからです。元京都大学霊長類研究所の正高信男先生は「赤ちゃんは歌を耳にすることによって、ことばというものを覚えはじめる」と言っておられます(『子どもはことばをからだで覚える』中公新書 2001)。

喜んで手足をバタバタさせること、これがとても大事です。この勢いで発声が出てくる。語りかけも、発声を促すので、わらべうたは大事なのです。また、正高信男先生の研究によれば、赤ちゃんは生まれつき協和音を好むことがわかったとのことです。



乳児期の音の環境について、保育指針には次のように書かれています。

静かで落ち着いた環境の下では、子どもたちはわずかな音やささやかな動きであっても敏感にそれらに気づき、何かを知らせる。これらの発見に保育士等が共感的に応え意味を付与することで、子どもの細やかで敏感な感性が育つ。****

【精神的発達 内容②】

大人なら立食パーティのような雑音がある場で、周りの雑音を消して前の方と話をすることができます。でも赤ちゃんにはその力がなく聴覚がよくてすべての音が入ってきます。食事が運ばれてくるカチャカチャという音、外を走る車の音、誰かの泣き声、大人の声、すべてが入ってくるので、結果として不協和音となります。だから乳児の部屋は音の環境に配慮する必要があります。それが保育者の専門性です。お勧めなのは安らげるぼんやりできる空間です。





ここだと周りの音から和らぎますね。こんなところも工夫してみましょう。

「子どもが安心して落ち着ける保育室とは、くつろげる、やわらかいものに触れる場所がいくつかある」という言葉が『環境スケール』の中に書かれています(『保育環境評価スケール〈2〉乳児版』テルマ ハームス著 法律文化社 2009)。

そういう観点では、保育者の膝の上で絵本を読んでもらうことは、あったかくくつろげるいい環境です。この時期に1対1の関わりで絵本を読むことが大事、これが信頼関係を育んでいきます。これがなぜいいのかと言うと、安心できる基地があることが探索意欲を高めるからです。

視線の先の保育者、探索活動であちこち探索しながら、子どもは保育者の方をちらちらとよく見ませんか。

保育者がニコニコと見守っていたら安心して冒険を続けられます。探索活動している時にピタッとそばにいたのではなく、安全な環境をつくった上で保育者同士は見守りの空間の対角線を意識します。どこからでも子どもの動きをとらえられる位置で見守るとよいと思います。



3. 精神的発達の視点

生活や遊びの中で色んなものに触れて、音、形、肌触りなど五感で世界を知っていく時期です。いろんな手触り、感触のものを用意してあげましょう。ぎゅっと握ったら可逆的なもの、木もいいですが、布などいろんな感触のものを用意しましょう。音もそうです。今回はじめて指針のなかで「玩具の音質にも注意しましょう」と書いています。そして、子どもがいつでも自分で取れるように置いてあげましょう。おもちゃ棚にはあまりぎゅうぎゅうに入れると遊びにくいので、適量を入れてどんどん入れ替えしていくことが大切です。

この時期の子どもが受け止められる程よい程度の複雑さをもって環境構成をしましょう。

子どもは4色(赤・青・黄・緑)に注目します。生まれたときは視力0.02と未熟でぼんやりしているのです。赤などはっきりした色の方が興味を持ちやすいのです。また、カーペットに動物の模様などないほうがおもちゃを追視できます。モビールなどを吊るとゆるやかな風でゆらゆらと揺れ、追視を促しますが、壁に色鮮やかな壁面がないほうがモビールを追視しやすいです。壁面装飾が良い悪いではなく、こういう発達を支援する場合はない方がいいということです。



精神的発達のに「玩具や身の回りのものをつまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。」と書かれています。なぜ手や指の発達が精神的発達のに書いているのでしょうか。メッセージを深読みしなくてはなりません。つかんで遊びたいという意欲、できたという喜び、のところが大切にしましょうということです。

それでは、どこの園でも作っておられる「ポットン落とし」で見えていきましょう。ちょっと頑張るとできること、最近接領域を上手に持っていくと意欲につながります。達成感が大事なので難しすぎないこと。そういう発達段階を細かく考えてあげると、ちょうどいい遊びが見つかります。握る時はホースやお手玉でよい、つまめるようになったらチェーンリングやちょっと細い棒にしてあげたり、つまんで向きを変えするという次の段階があります。つまんで手首を回す、これができないと平仮名は書けません。2歳くらいになって「迷路書こう」とやることも大事だけど、その前の時期につまんで手首を回す活動を十分しましたかということが大事なことです。



にぎる



つまむ



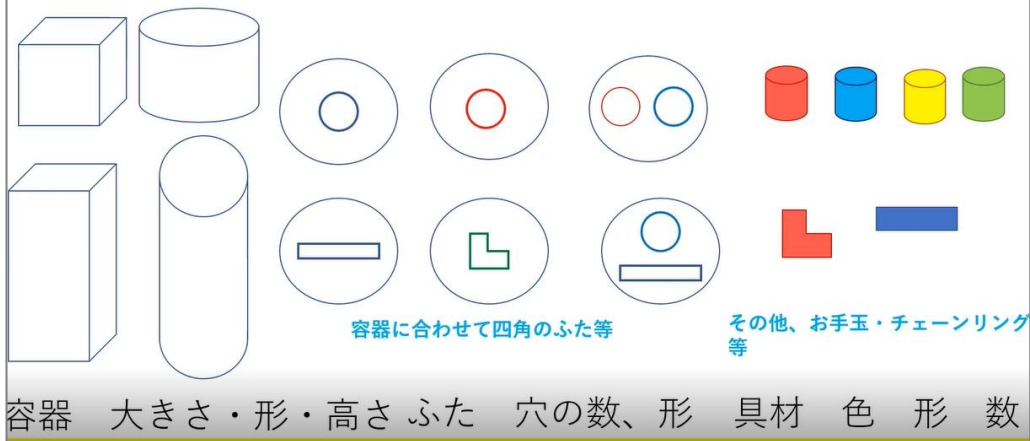
つまむ【向きのあるもの】



つまむ【手首をまわすもの】



発達に応じて、適した物を用意する



こういう遊びをしている時、保育者は背中を向けずに喜びを共有できる位置で見守ってください。変わったポットン落とし。試行錯誤しています。



配慮点

・手指の動きについての発達過程	→ 難易度
・具材の数	→ 集中力
・色分け	→ 一人一人の遊びを保障する
・丈夫さ	→ 安全性

保育者からの質問

Q おもちゃを本来の遊び方でない遊び方をするのですが、持ち歩きます。

A 本来の遊びではない、お皿を頭に載せていたり、積み木をお世話遊びのところに持って行ったり。これは安全には十分配慮した上ですが、禁止しないでください。遊びは子どもの自発性にもとづくので子どもが決めます。おもちゃを持ち歩くことについても指針に書いています。

遊び方、遊ぶ場所も子どもが選びます。子どもが遊びやすいように考えてあげましょう。

禁止の言葉を出す前に、「この子は何をしようとしているのだろう」と自発的な姿の内面を考えてみるのが大事です。



積み木のところから持ち出した子。積み木を90度になっているところを利用したら高く積めるという事がこの子は分かったのです。こういうことを乳児に経験していたら幼児になって本格的に積み木を積み上げる時に、こうしたら積めるということが分かります。右の写真は安定して高く積めるゴールデン積み方です。もう乳児さんで発見しています。こんな姿を保護者さんにぜひ伝えてあげてください。「○○ちゃんは天才です」

って。子どもは遊びの天才、それを見つけるのが私たちの専門性です。それを保護者に伝え成長の姿を共有する子育て支援を。

最後に河合隼雄さんの言葉を黙読。

この宇宙の中に子どもたちがいる。これは誰でも知っている。
しかし、ひとりひとりの子どものなかに宇宙があることを、
誰が知っているだろうか。

それは無限の広がりと深さをもって存在している。

大人たちは、子どもの姿の小ささに惑わされ、
ついその広大な宇宙の存在を忘れてしまう。

大人たちは小さい子どもを早く大きくしようと焦るあまり、
子どもたちのなかにある広大な宇宙を歪曲してしまったり、
回復困難なほどに破壊したりする。

このような恐ろしいことは、しばしば大人たちの自称する「教育」や「指導」
や「善意」という名のもとになされるので、余計にたまらない感じを与える。

『子どもの宇宙』 河合隼雄 岩波書店 1987年

1 歳～3 歳未満の保育

保育指針、教育・保育要領には、保育の目標について次のように書かれています。

保育の目標

子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う

【保育所保育指針 保育の目標】

子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う

【幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 教育及び保育の基本及び目標等】

人生 100 年時代と言われています。100 年を見据えた保育を意識しておくといいですね。

5 歳以降、思春期までの子どもがどうなっているのかを見てみましょう。2020 年ユニセフ幸福度調査では日本は 20 位、全体の真ん中くらいです。その内容が心配です。

日本の子どもは医療が発達している所以身体的発達は 1 位です。でも精神的幸福度は 37 位で下から 2 番目です。スキルの面で保護者の方は字が書ける、何かができるということを気にかけますが、社会的スキルが弱い。失敗から立ち直るとか自己肯定感、他者と良好な関係をつくる、好奇心が豊かなど非認知的能力と言われる部分です。見えない力です。

分野	指標
精神的幸福度 (37位)	<ul style="list-style-type: none"> ・生活満足度が高い15歳の割合 ・15～19歳の自殺率
身体的健康 (1位)	<ul style="list-style-type: none"> ・5～14歳の死亡率 ・5～19歳の過体重/肥満の割合
スキル (27位)	<ul style="list-style-type: none"> ・数学、読解力で基礎的に習熟度に達している15歳の割合 ・社会的スキルを身につけている15歳の割合

言葉の体験は愛情の体験と言われますが、肯定的な言葉を乳幼児にはかけてあげましょう。『3 千万語の格差』(ダナ・サ

スキンド著 掛札逸美訳 高山静子解説 明石書店 2018)のなかに、たくさん肯定的な言葉をかけられて大きくなった子は、10 年先に自分に自信があったり、他者と良好な関係が築けたり幸福度が高かったということが書かれています。言葉は大人が変えることができますから、これは大切な視点の一つです。

1 歳児

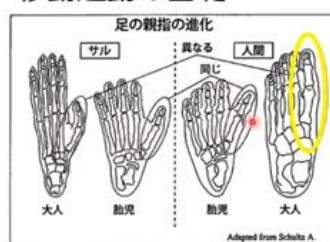
自分でしたいという気持ちを尊重し、満足感が得られるように好きな遊びをたっぷりできる環境をつくりましょう。どんどん動きます。バリエーションのある粗大遊び、見たて遊び、手首のひねりやつまむ・めくるなど手指の機能も発達してきて微細遊びなどができる環境を保障していきましょう。五領域で見ていきましょう。

健康

重いものを押したい遊びが大好きです。土踏まずの形成です。親指をしっかりと踏ん張っています。

図はサルと人間の骨の比較です(出典『乳幼児のための脳科学』小泉英明他 かもがわ出版 2010)小さい時は骨の形は一緒ですが、サルは木の上で暮らすことを選んだので大人になっても同じ。でも人間は二足歩行を選んだので、大

移動運動の基礎



『乳幼児のための脳科学』小泉英明他 かもがわ出版 2010

人になると足の指が伸びていっています。そのために土踏まずをつくるのが大事です。滑り台を1歳の子は下から上がろうとします。大人は「滑り台」の名前にこだわるので、「すべってね」と思いますが、子どもは本来の遊び方と違うことをしています。高這いでのぼることが発達への支援につながります。これは心の発達への支援にもなります。

人間関係

友達と取り合いになったり、かみつきの起こったりします。それでも大人が受け止めて安心して過ごすことが大切なことです。受け止められてはじめて友達と一緒に楽しいとなります。テラスに二人で座る椅子があるのですが、この子はそこに一人で座りたくて、一人で座っていました。『はんぶんこ』(福音館書店 月間絵本)という絵本が好きで、自分のリュックに入れてお友達を見つけては本を取り出して「はんぶんこ」と食べるまねをしてイメージの共有をしていました。ある時、テラスの椅子に「はんぶんこ」と言ってお友達と座って遊んでいました。「はんぶんこ」が楽しい経験が増えるということを感じて、大人に指示されてではなく自分から気づいて行動したということです。



皆さんはかみつきのついてどうされていますか。言葉でまだ十分表現できないため、「どいて」「かして」と言わないでガブッとやってしまったりします。そして保育所やこども園には体調が万全でないのに来たりしますよね。イライラして来たりということもあります。一番多いのは特に理由がなく、横にいるからかんでしまったということもあります。だから難しいけれど、できるだけゼロにする方法を考えていきましょう。

この子に適した遊び環境はありますか? 2週間前のおもちゃと今のおもちゃが全く変わっていなかったら、高月齢児は確実に遊びに飽きています。好きなおもちゃや遊びがあったとして、集中して遊べる環境が確保されていますか? 不要なものがたくさんありませんか? 保育者の私物、貼らなくていいものがベタベタと貼り付けてあるなどはありませんか?

『小さき太陽』

よろこびの人は、子どもらのための小さき太陽である。
明るさを持ち、温かみを伝え、生命を力づけ、生長を育てる。
見よ、その傍らにたつ子どもらの顔の、ききとして輝き映ゆるを。
なごやかなる生の幸福感を受け、充ち溢れているを。

これに反し、不平不満の人ほど、子どもの傍らにあつて有毒なものはない。
その心は必ずや顔を陰しからしめ、目をとげとげしからしめ、言葉をあら
あらしからしめる。これほど子どものやわらかき性情を傷つけるものはない。

『育ての心』(上) 倉橋惣三 フレーベル新書12 1976年 p25

太陽は自ら光、熱を発しています。地球や月は自分では発しません。私たちが小さい太陽になって、その子のいいところを友達や保護者に伝えることが子どもの幸せにつながるのだという事を倉橋惣三さんから学びました。名著ですからぜひ読んでみてください。

先生が左の子にやさしく語り掛けている様子を右の子が見ていること、それが大事です。叱る言葉、禁止語をいつも言ってるのを聞かされていたら、言われていない子も傷つきます。職員同士も悲しい気持ちになりま

す。肯定的な言葉かけがいつも必要です。

生活や遊びの中で身近な大人に共感してもらいながら達成感を積み重ねていく事が、気持ちを立て直す基礎になっていきます。腹が立つことがあってもかんだり叩いたりするのではなく、自己抑制ができるようになっていく。そのためにはしっかりと受け止めてもらえる体験が大事です。

環境

両手の協応、手と目の協応、慎重によく見て遊んでいます。ですから1歳クラスになると机とイスを用意し机上遊びを用意する方が遊びやすくなります。その遊ぶ中で物の仕組みに気づいていきます。机上遊びの良いところの一つは隣の子のすることをじっと見て真似する、学び合うことができます。



棚の中に一人ずつのおもちゃを入れて置いていることで、そのまま出してきて遊びやすくなります。大人が

片付けるモデルを見せていくことで、いつか自分で元の所に戻すようになります。よく入っている物のシールを貼っておく必要があるかと聞かれます。1歳半くらいになると「AではないBだ」の理論がわかるので、こっちに入れられないからこっちにと分かるようになります。シールを貼らない方がいいかなと思うもう一つのポイントは、おもちゃの入れ替えのスピード感がなくなります。子どもの発達は早いので、どんどんおもちゃを入れ替えしていかないと飽きてしまいます。

言葉

いろんな言葉を獲得していく時期になっていきます。生活の中の身近な大人の姿を模倣して遊びます。乳児期とちがって遊びがていねいになっていきます。

お友達と、遊びを共有できるように



クラスの数と発達を考慮して適切な数を準備する

1歳児さんも簡単に着脱できる帽子、スカート、ズボン、バッグなど用意してあげるとよいでしょう。人のことが気になるようになると、遊びの流れをうみだす環境構成をつくっていきます。友達と一緒にバッグをもってピクニックに行くなど、簡単な物語が生まれます。

表現

同じ遊びでも子どもによって遊び方がちがうという例を2つ。きっと、そんな姿があると感じるでしょ

う。長くつないで、自分の周りを囲った子(左)、「ながーい」とつないだ達成感を味わっている子(右)。



発散系の遊びもこの時期大事です。水遊び、泥遊び、その中で友達との関係を意識します。ポンプを押すと水が出てくるなど、物事に関連性、仕組みもわかってきます。

保育者が一人一人自分の遊びに集中できるように玩具、遊びの空間を考慮し見守ることで、個性豊かな自己を発揮します。

2歳児

自分の思いを持って外の世界に働きかけ、その結果に達成感を得たり、失敗しても気持ちを立て直していく、つまりレジリエンスです。

健康

走る、飛ぶ、登る、押す、引っ張る、2歳はダイナミックに動きます。2歳児クラスの先生は困ってしまうことがあります。0歳1歳の時にはお部屋の中に粗大遊びの空間を用意できました。でも2歳になると一人当たりの保育室の面積が急に小さくなります。でも子どもたちは動き回りたいですね。一緒に考えてみましょう。

遊びには子どもの育ちを促すいろんな要素が含まれていますが、個の力としては思考力・企画力・想像力。この子たちが社会に出ていくときには、読み書き計算よりもこれらの方が大事です。これらを発展させるには自ら没頭することをさせてねと書いています。つまり時間・空間・道具の保障、それから対物、対人との関わりを多面的に体得していきます。仲間が大事です。

2歳児くらいの質問として、「柵の上に登ったり、おもちゃを投げたり、一人がやりだすと他の子もやりだします。どうすればいいでしょう」。日本全国共通の悩みです。たとえば「投げる」、投げたい要求を保障してあげたらいい。でもまだキャッチボールで投げたりということは難しいです。そんな時は四角を書いておいたら、そこに向けて投げます。赤と青で重さを変えたり、ゴムを1本通すと投げ方が変わります。



子どもが遊び方を考えました。
赤と青の上を飛び石みたいに歩こうという遊びです。靴で踏んだらダメと思い裸足になり、赤から青への一方通行。



高這いで載せて落ちないように移動する遊びもうまれました。それを見ていた周りの子は「強い赤ちゃん」と表現しました。

自分の知っている言葉で、目の前で起こっていることを表現しています。2歳児らしい言葉の表現です。

遊びとは創造の連鎖です。

多様な発達の姿がそこに見えてきます。

環境

玩具、遊具、絵本に興味を持ちそれらを使った遊びを楽しむ時期です。そのために、自分の好きな遊びに集中できる環境が大切です。視覚刺激にまだまだ左右される年齢ですから、1か所だけでも壁に向かってテーブルを置いてあげる環境が2歳児にはよいでしょう。

特にパズルなどは横から口出ししてきますね。好きな遊びが見つけれない、集中できない、というのは集中できる環境ができていないのかもしれないですね。自分の遊びに十分向き合うことで気持ちに余裕が生まれるので、お友だちとも共有できるようになります。つまり一人一人の遊びをしっかりと保障することが大事なのです。



「片付けがなかなかできません。子どもに促すがぐちゃぐちゃになってしまう」。よくある質問です。保育

者が1日中、片付けに追われることになります。「子どもは大人の言うことは聞かないが、大人のすることはまねる」という言葉があります。片付けるというより遊びの中に組み込んでいくことがよいと思います。お人形が裸で転がっていることがよくあります。では、片付けることが楽しくなるような工夫として、お人形用の洋服掛けを作ってみましょう。突っ張り棒とペット用ハンガーを用意したらいいのです。着替えができると楽しいですね。



お肉を焼く係 ポテトを揚げる係

お店屋さんごっこも楽しいです。お店屋さんのユニフォームは自分で着脱できるように配慮しましょう。ユニフォームを自分で着る、帽子はゴムで留められます。スカートも下からはけるタイプになっています。うちは2歳児24人1クラスで、エプロンと帽子を3セット用意しています。だからハンバーガー屋さんは3人。来客対応とパソコン、電話も用意して注文対応もします。肉を焼く、ポテトを揚げる、子どもの手にあった道具を用意します。

食材を整える



また、お客さんが来られた時にすぐに出せるように食材を整えています。大人びたような顔つきですね。子どもはずっと遊んでいるので片付けるという意識はありませんが、遊びに夢中になると見通しをもって準備をするようになります。

表現

感触遊び。光の遊びを乳児の所で紹介しましたが、2歳はちょっと違います。クリスタルボールを窓の所に吊るしておきます。この時期の特徴である語彙爆発。つかまえます、パクっとたべて「あまい」「おいしい」などいろいろ表現します。友達と食べさせ合いをして遊びます。同じ光の遊びでも乳児と1歳、2歳はテーマがちがってきます。

感触遊びで言うと、水遊び、泥遊びもいいけれど、できれば常設で保育室の中に造形のコーナーを作ればいいですね。好きな時に素材に触れる、存分にぬたくりができます。



フィンガーペイントを常設でなんて、お部屋の壁や服などが汚れたりボディペインティングになってしまうと心配されるかもしれません。もしそうなるのであれば発散系の遊びが足りないのかも知れません。ここでやるんだよと言うと簡単なルールはわかります。まずは外でボディペインティングをすればいいかも知れません。

言葉

2歳と3歳で言葉の発達がずいぶんちがいます。2歳児クラスは小さな異年齢クラスともいえます。2歳で200語、3歳で1,000語。2歳くらいは命名期と言われ「あれなに」「これなに」。3歳は質問期で「なんで」「だって~」と言うようになります。ということは、言葉でやりとりして遊ぶのは3歳くらいですが、2歳でも見たてたりつもりになって遊びます。その遊びの違いを見ていきましょう。

2歳 『サンドイッチ サンドイッチ』(小西英子さく福音館書店 2008)という絵本。サンドイッチを作る工程が絵本になっています。この絵本の魅力、食材がゴージャスです。サンドイッチが作れる食材を用意してあげるとよいですね。フェルトを切っただけでよい、見立てる余裕を残しておきます。人形に食べさせ先生のつもりになっています。行為を模倣することによって、やがてそのことの本質に気づいていきます。だから2歳児の時期は模倣あそびが出来る環境構成が必要です。



3歳 役割が登場します。看護師と医者、患者の役割になり、予防注射をする場面でした。看護師役の子は注射をする時にチラチラと患者さんを見ていました。気分が悪くないか看護師さんは見ますね。それをよく見ていて模倣しています。





この子は毎朝来ると、観葉植物を倒してしまいます。保育者が時々「木さん、いたいんじゃない」と声掛けしていましたが。ある時、お医者さんごっこの所に誰もいない時、白衣を着て聴診器で診察して、木の又のところで熱を測って包帯をして撫でていたという場面がありました。この子はまだ言葉で会話はしませんが、きっと心の交流をしているような気がします。その子が何を表現しているのか、心の育ち、遊びの表現を私たちはていねいに見ていく、寄り添っていくことが大切だろうと思います。

おわりに

見守られ、自己を発揮し、生活の主人公になっていく子どもたちです。幼い子どもたちが現在をもっとも良く生きるために、私たちは一人一人の子どもたちを深く愛し、ともに専門性を高めていきましょう。ご視聴ありがとうございました。

瀧 薫 プロフィール

社会福祉法人子どものアトリエ理事長、城東よつばこども園園長。

和歌山県橋本市城山台幼稚園副園長、西宮市日野の森保育園園長を経て、2018年より現職。絵本やおもちゃ・環境をテーマに講演活動を行っている。

著書に『保育と絵本』（エイデル研究所 2018）『保育とおもちゃ』（エイデル研究所 2018）など。

『幼児教育・保育の質の維持・向上のための
研究・研修事業』に関する報告資料集

令和5年3月10日発行

発行：堺市 子ども青少年局子育て支援部 幼保運営課

〒590 - 0078

堺市堺区南瓦町3番1号

TEL：072 - 228 - 7231

FAX：072 - 222 - 6997

編集：特定非営利活動法人ちゃいんどネット大阪

〒540-0006

大阪市中央区法円坂1-1-35

アネックスパル法円坂

TEL：06 - 4790 - 2221

FAX：06 - 4790 - 2223

●無断転載を禁ず